

## さまざまなる命名法 構成生薬など反映

**Q** 漢方薬は独特な名前がつけられていますか、命名の方法や法則があるのですか。

**A** 漢方薬は通常複数の生薬をブレンドすることによって、生薬の持つさまざまな薬効をきわだたせ、逆に副作用が出にくいようにする。ブレンドの妙こそ、漢方薬の特徴である。中国では三世紀初頭以降、優秀な処方には命名され、現代に伝わっている。

命名の仕方は実にさまざまに法則性はない。オーソドックスな命名はその処方の主薬を冠する。例えば、桂枝(けいし)が主薬の桂枝湯、麻黄(まおう)が主薬の麻黄湯などである。

構成生薬をいくつか組み込んだ命名もある。当帰芍薬散(とうきしゃくやくさん)、桂枝茯苓

丸(けいしぶくりようがん)などである。構成生薬すべてを連ねた厚朴生姜半夏甘草人参湯(こうぼくしょうきょうはんげかんぞうにんじんとう)などの処方名もある。

六君子湯(りつくんしとう)など六つの生薬からなり、君子のようにマイルドな効果という意味を込めた命名もある。当研究所初代所長・大塚敬節先生創製による七物降下湯(しちもつこうかとう)は七種類の生薬を組み合わせた降圧剤である。

白虎湯(びゃつことう)など威勢のいい名前もある。これは東西南北を守る守護神にちなんだ命名。抑肝散(よつかんさん)の肝は漢方では肝臓ではなく癪癩(かんしゃく)の癪を表し、これを抑えるという意味である。